

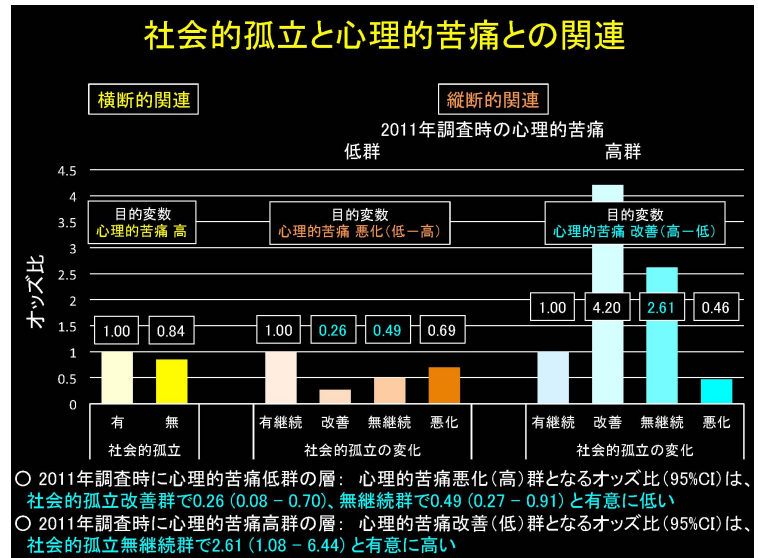
東日本大震災後の社会的孤立と心理的苦痛との縦断的関連

Longitudinal association between time-varying social isolation and psychological distress after the Great East Japan Earthquake
2015年 Social Science & Medicine 発表

社会的孤立状態が改善した人、継続して社会的孤立に無かった人では、心理的苦痛悪化の割合が低く、改善の割合が高い

被災者を対象に社会的孤立と心理的苦痛との関連を調査した先行研究は複数ありますが、その関連性は一致していません。また、先行研究は横断研究による関連性が調査されているのみで、社会的孤立と心理的苦痛との縦断的関連性は明らかになっていません。本研究は、社会的孤立の改善、社会的孤立無の継続は心理的苦痛の悪化を防ぎ、改善させるという仮説を明らかにするため、社会的孤立と心理的苦痛との縦断的関連性を調査しました。

その結果、2011年調査時に心理的苦痛が低群の層では、社会的孤立が改善していた人、孤立無の状態が継続していた人で、心理的苦痛悪化の割合が低いことが分かりました。一方、2011年調査時に心理的苦痛が高群の層では、孤立無の状態が継続していた人で、心理的苦痛改善の割合が高いことが分かりました。



研究データについて

本研究は被災者健康調査に参加した人を対象に調査を行いました。対象地区は、宮城県石巻市3地区(雄勝・牡鹿・網地島)と仙台市若林区でした。被災者健康調査は約半年ごとに行い、上記住民および過去に調査に参加し、その後の移動住所が分かる人に対しても調査票を郵送して実施しました。

本研究では社会的孤立と心理的苦痛との縦断的関連性を明らかにするため、2011年調査(第1回)と2014年調査(第7回)に参加した人を対象としました(1180名)。最終的な解析対象者は、2011年及び2014年調査で社会的孤立、心理的苦痛、経済状況、飲酒、喫煙、主観的健康度の質問項目に回答していた959名でした。

社会的孤立について

社会的孤立はLubben Social Network Scale-6で調査しました。Lubben Social Network Scale-6は「少なくとも月に1回、会ったり話をしたりする家族や親戚は何人いますか」、「あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる家族や親戚は何人いますか」、「あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる家族や親戚は何人いますか」、「少なくとも月に1回、会ったり話をしたりする友人は何人いますか」、「あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる友人は何人いますか」、「あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる友人は何人いますか」の6項目の質問で構成され、「0人(0点)」、「1人(1点)」、「2人(2点)」、「3~4人(3点)」、「5~8人(4点)」、「9人以上(5点)」を選択するものです。得点の範囲は0~30点であり、社会的孤立の判定は12点未満を社会的孤立有群としました。社会的孤立の変化は、2011年及び2014年調査のスコアから4群に分類(社会的孤立有継続群、改善群、無継続群、悪化群)しました。

心理的苦痛について

心理的苦痛はK6で調査しました。K6は「神経過敏に感じましたか」、「絶望的だと感じましたか」、「そわそわ、落ち着かなく感じましたか」、「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」、「何をす

るのも骨折りだと感じましたか」、「自分は価値のない人間だと感じましたか」の6項目の質問で構成され、「全くない（0点）」・「少しだけ（1点）」・「ときどき（2点）」・「たいてい（3点）」・「いつも（4点）」を選択するものです。得点の範囲は0～24点であり、心理的苦痛の判定は先行研究での報告を基に10点以上を心理的苦痛高群としました。心理的苦痛の変化は、2011年及び2014年調査のスコアから4群に分類（心理的苦痛低継続群、悪化群、高継続群、改善群）しました。

他のリスク要因の影響について

本研究では、社会的孤立と心理的苦痛に関連すると考えられている要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、性別、経済状況、飲酒、喫煙、主観的健康度、自宅の被災状況、家族で震災により亡くなった方、調査地域について、グループ間に偏りがないように統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

本研究の長所として、本研究は社会的孤立と心理的苦痛との関連性を縦断的に調査した最初の研究であることが挙げられます。一方、本研究の限界として以下のことが挙げられます。第1に、対象者数が十分に多いとは言えませんでした。第2に、調査項目への回答率が十分には高くはありませんでした。第3に、本研究の対象者は震災の影響を受けていない人を含んでいなかったため、震災に起因する心理的苦痛の変化を正確には把握することができませんでした。
